

医者も知らない、平穩死



連載③

〈長尾和宏〉長尾クリニ
ック院長。日本尊厳死協
会副理事長。著書に「平
穩死」10の条件」など。

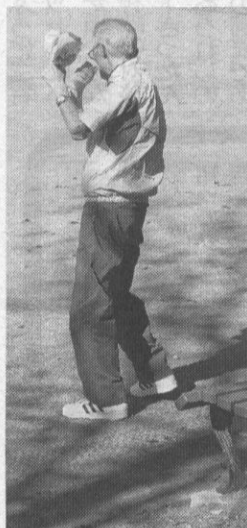
98歳のお母さんを、ひとりで介護しているS子さん(63)。お母さんは認知症もあり、車椅子生活。大変な毎日だと思いますが、

「介護はいい恋愛と似ている。今が人生の中で一番幸せ」とおっしゃいます。

母と娘2人だけの生活で、お母さんと離れる時間は1週間たった3時間だけ。週1回の訪問看護師が来る時と、自宅で介護をする家族を中心に集まる会に出る時です。

「それでも全然苦にならへん。今の生活の一瞬一瞬が、いとおいしいねん」

死はいつか来るけれど



(写真はイメージ)

実は2年前、医師に「お母さんはもう長くないでしょう」と告げられました。Sさんはお母さんの顔を見るたびに泣く毎日。ところが驚いたことに、お母さんは少しずつお元気に。

「それまでお母ちゃんをデイケアに通わせていたんやけど、100歳間近でデイケアはしんどいやないかと

思って「行かんでええよ」と言ったら、〈おおきに〉とって。デイケアをやめたら、ますます元気になるしました」

そんなお母さんは、Sさんの言葉を借りれば「やりたい放題」。しばしば好きなイタリア料理店で、

ワインを飲み、カルパッチョやガーリックトーストやピザを手づかみで食べま

す。

「考えてみたら、手づかみが一番安全。熱いかどうかも分かる。とにかく自分です。手づかみになってから、ちよろどいいペースで食べられるからか、むせることがなくなつた。便も素晴らしい形のものが出る」

「いつか来る別れの時まで、おかあちゃんには家の中で好きなように過ごしてほしい。死を悪いものとして捉え、(危ないから)あれもこれも駄目、とはしないようにしているんです」

私はSさんのお母さんが大好き。幸福な人生だなあ、と心から思います。